

楯原神社

延喜式内社 祭神 武甕槌大神 大国主大神

社伝によると崇神七年の鎮座 『いにしえは、もと字楯原（現在の喜連西1丁目、近畿電波管理局敷地）にあったが、兵火にあつて現在の地に遷座し、桓武天皇のとき（西暦800年頃）字十五の竜王社を合祀し、境内別殿として奥の宮と称した。さらに、元和年間（1620年頃）付近の天神社を合祀し、天神社と称するようになり、楯原の社名は別殿の奥の宮に移った。（現在の奥の宮には、十種神宝宮を摂社として遷座、日本最初の神宝で、十種の扱は大正3年内務省選定） このため、明治5年、式内の楯原神社は社格を得ず、併祀の天神社が村社となる状況であったが明治40年、神社整理を機に現在の社名に改められた。当社には万葉集にも詠われている息長家の碑が祀られている。また、隣接の如願寺は、当社の宮寺であったが、明治維新後分離した。』平野区役所

神宝十種宮略記

配祀神

布留御魂大神（十種神宝）は、天璽端宝十種に籠る靈妙（くしび）なる御靈威にます。端宝十種は謂ゆるおき津鏡一つ、辺都鏡一つ、八握生劍一つ、生玉一つ、死反玉一つ、道反玉一つ、蛇比礼一つ、蜂比礼一つ、品物比礼一つにして、神代の昔饒速日命が天降り給る時、天つ神の詔をもって「若し痛む処あらば、この十種神宝をして甲乙丙丁戊己庚辛壬癸一二三四五六七八九十と謂いて布瑠部由良由良止布瑠部。此く為さば死人も生き反えらん」と教え諭して授け給いし靈威高き神宝なり。其の御子、宇摩志摩治命は神宝を天皇に奉り節靈の御前に蔵めて永く宮中に奉齋せられたが、崇神天皇の御代に節靈と共に石神布留の高庭に鎮り給うた。

付記

十種端津の宝の当地に鎮座ましますに至る由来は、其の昔永禄年間室町幕府の末期足利義昭が織田信長に奉ぜられて入京、そして永禄十一年十月十八日征夷大將軍に任ぜられ室町幕府第十五代將軍になった。

然れどもすでにその権力はなく、信長の力にたよらなければ何事も出来なかった。しかし義昭は將軍となるや大和の法隆寺、石上神社、山城の大徳寺、紀州の根來寺、摂州の本願寺など畿内の主な社寺や有力な大名に呼びかけて味方につけようとした。為に当然信長と衝突した。かくするうちに天正元年義昭は公然と武田、浅井、朝倉、本願寺などと手を組み信長討伐にのりだした。

しかし信長はたちまち反撃に出てそれをおさえた。その時、天正元年八月石上神宮も織田の武将達の焼打ちにあひ財宝はうばわれ十種端津神宝は持ち去られた。その後、天正十年信長は本能寺に明智光秀に討たれ、光秀又豊臣秀吉の為、山崎の合戦に破れ天正十三年秀吉天下を取るに至る。

石上神宮の神宝十種端津の神宝は心ある士に守られて保護されていた。秀吉その士に十種端津神宝の話聞き余りの有難ささと現実の因果におどろき十種端津の神宝を生魂の森深く永久に鎮まませと納め奉った。時は流れ徳川幕府も終わりの倒幕運動が大詰にはいった慶応三年八月下旬、名古屋地方に伊勢神宮のお札が降ったとのうわさをきっかけに老若男女が気遣いの様に踊り狂い乱舞は日に夜につづき、はじめは京都、大坂、大津など近畿地方に行われ、次第に日本全国に及んだ。鳴物入りで「ええじゃないか」のはやしをつけた卑俗な唄をうたいながら踊り歩いた。これはかつての「おかげまいり」にみられた宗教的興奮が倒幕直前の政情不安に乗じて形をかえた「世直し」騒動の要素も交じっており氣にくわぬ地主や富豪の家に踊り込み暴れ廻った。そして暴徒は社寺仏閣にまで押しかけて荒れ狂い、生魂の宮もおそわれ神宝十種端津のほしいままにされた。其の時に神宝端津の宝は二度目の難を受け暴徒に持ち去られて、生魂の森よりお姿が消えた。

その後神宝は町の古道具屋の店頭にさらされていたのを喜連に住む小林某なる人により発見され買い求めてこれを家にて祭れり。後小林氏当地を去るのあたり浅井氏に預け、浅井氏又この地の旧家増池氏に預けられしが、増池氏敬崇の志厚く、永代御灯明料共に神宝を式内楯原神社に奉納し社殿を建立し齋き祭るに至れり。

後に室戸台風にあひ、社殿はたおれ長らく拝殿に祭り居りしも、今里の庄司善雄氏（石上神宮守護の子孫）が尋ね来り神宝を石上神宮へかえしてくれる様頼まれしも、この尊き神宝をかえさずに新しい社殿を建立してこれを末永く齋き祭るに至れり。

河内国河上の岬峯に天降座りしより幾千年、神宝はよき地を得て鎮まる処を得るなり。